

比庵佳境の会



陶：金田盛太郎 絵付：清水比庵
水仙 歌：年々によき年なれと八十比庵

年々によき年なれと祈りつゝ
拾ひし年の積りたるかも

八十比庵



陶：金重素山 絵付：清水比庵
壽 歌：年々によき年なれと比庵八十四

年々によき年なれと祈りつゝ
拾ひし年のつもりたるかも

比庵八十四

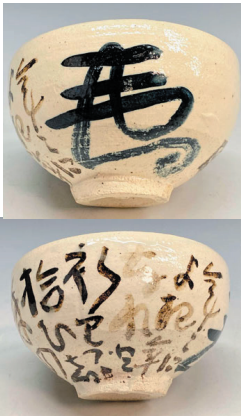
清水比庵とやきもの

笠岡市 豊池 勇

歌人であり歌・書・画の三芸に秀で、満八六歳に週刊朝日に今良寛と紹介された清水比庵は、歌・書・画に多くの作品を残しているが、歌碑・屏風画(書)・絵手紙(晩年は線画+歌)・窓日彫(木彫家矢部犀洲との共作)・茶器などのやきものへの画(歌)など幅広い分野で活動していた。本号では比庵の熱烈な信奉者であり、比庵作品を数多く取り扱っている岡山県笠岡市の美術商の豊池 勇氏に比庵の茶器などの焼き物について書いて頂いた。(豊池氏は比庵佳境の会の会員でもあり、会報13号で窓日彫の紹介もしている) 比庵佳境の会 会長 清水 固

1 金重素山の茶碗

写真(上、左)は岡山県重要無形文化財保持者である金重素山(かねしげ・そさん)先生の陶房(岡山市円山)に於いて制作した比庵先生の八十四歳の茶碗です。



この年は「歌人・清水比庵」に画期的な歳でした。この年の宮中歌会始の儀で歌召人(うためしうど)に任じられ当代一の歌詠みと認められた年です。写真の茶碗は、鉄釉

(茶色)と呉須(青色)でのびのびと書かれています。

年々によき年なれと祈りつゝ

拾ひし年のつもりたるかも 比庵八十四
他の作品にもこの歌を記し、比庵先生は余程お気に召していたと長らく解釈してまいりました。

ところが私自分が七〇歳を越えまして、少しいだけ比庵先生の老境に近づいてきますと捉え方が変わって来ました。

この歌は実に深い意味を含んでいます。まず、「感謝」

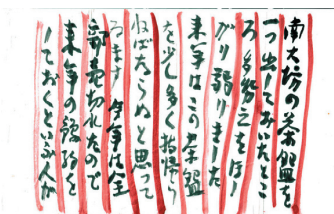
また新しく年を拾うことが出来た事への感謝。比庵先生の時代の人は年齢を正月に皆一斉に一つ年を拾うと云う数え年で捉えていました。

そして、「祈り」

新しい年が好い年になってほしいという祈り。明日になれば、どんな一日に出会えるかという期待を込めた祈り。

2 金田盛太郎のやきもの

金田盛太郎(かねだ・せいたろう)は岡山県里庄町で南天坊窯と称した個人窯で作陶していた人で、作家団体に属せずに独自の作陶を続け、没後は廃窯、現在は存在しない。南天坊窯のやきものは比庵先生が笠岡で個展を開催する時に皿や茶碗を展示しました。比庵先



比庵の友人への手紙

南天坊の茶碗を一つ出しておいたところ多勢これをほしがりました。来年はこの茶碗を少し多く持ち帰らねばならぬと思っております。今年全部売り切れたので来年の豫約をしておくという人が

生が知人に宛てた手紙の一節に「茶碗を並べたところ好評なので来年からは少しふやそうかとおもっています。」と記したものが残っています。

金田盛太郎のやきものに比庵が絵（歌）付けした作品を3点紹介します。

写真（左）の額皿の縁の面に
年々によき年なれと祈りつつ拾いし年の
積りたるかも
八十比庵
と書き、中に水仙を伸びやかに描いています。



陶：金田盛太郎 絵付：清水比庵
南山寿
八十比庵



白磁：金田盛太郎 絵付：清水比庵
わが庭にうぐひす
八十比庵

写真（右）は白磁に鮮やかな色絵を施した作品です。

わが庭にうぐひす鳴かせ千金の春のある
じにわれはありける
八十比庵

写真（上）は松に「南山寿」の文字を加えた正月用作品と思われます。

3 その他地元の人との合作

比庵は地元の色々な人のやきものに絵（歌）付けをしています。

3（1）笠岡吉備焼の窯元水川陶影との合作

吉備焼（きびやき）は笠岡市茂平（かさおかし・もびら）に於いてやきものを生産する窯元です。瀬戸内海に面した場所に在り、水川豊山（みずかわ・ほうざん）が明治期に始めた窯元です。水川陶影（みずかわ・とうえい）はその子息で吉備焼二代目です。

月ありぬあなうれしやとわれもひとつ
あま戸をさしぬ月にねむらん 比庵八十三



陶：水川陶影 絵付：清水比庵
月ありぬあなうれしやと
比庵八十三



陶：岡本治三郎 絵付：清水比庵

下草は
岡本章子



3 (2) 岡本治三郎との合作

笠岡で陶工ではない岡本治三郎氏の御庭焼との合作もある。岡本氏は笠岡商工会議所初代会頭、笠岡信用組合初代理事長を務めた財界人で、邸宅内に窯を築いて作陶を楽しんだが、比庵を敬愛し交流を温め、比庵はこどもも幾つか茶碗に絵付けをしている。

写真(左)で紹介する茶碗は珍しく比庵が竹を描き、笠岡在住の妹・岡本章子(おかもと・ゆきこ)が自詠歌を揮毫している。

下草はまだうらぶれて春あさき
土の面を飛ぶ蝶々ひとつ 章子

3 (3) 羽島焼小河原勝康との合作

羽島焼(はしまやき)は西洋絵画や民藝工芸を紹介する倉敷市の大原美術館に近い倉敷市羽島に在る窯元です。その初代・小河原虎吉は河井寛次郎・濱田庄司の薫陶を受け轆轤(ろくろ)の名手と謳われました。パーナード・リーチも度々来訪し作陶を重ねています。比庵先生と交流を得て作品を残されたのは、二代小河原勝康(おがわら・かつやす)で窯では大きな火鉢に揮毫する写真が撮影されています。丸鉢に

無 おもかげはあたたかくして
いつまでもありて残れりいつまでも
いつまでも 比庵九十



陶：小河原勝康 絵付：清水比庵

無 おもかげは
比庵九十



3 (4) 京都黒楽茶碗

写真(右)は比庵が描いた富士山を京都の和楽が黒楽茶碗に仕上げたものです。



陶：和楽 絵付：清水比庵
富士山
比庵

比庵の富士山茶碗はこの他にも幾つかあります。

4 まとめ

清水比庵の芸術に関して、いつの頃からか「比庵三芸」と云う表現を得るようになりました。三芸とは「書・歌・画」を示します。私は、清水比庵先生は「歌詠み」、比庵芸術の根幹は「歌」から発していると解釈しています。

日常のささいな感動、心の動きを歌に詠む「人間讃歌」の芸術だと想います。

人間って素晴らしいなあ 生きるってありがたいなあ

それを表情に富んだ書体で書き、それをイメージするのを助ける為に味わいの深い画を添えて残されたと想います。

このたびご紹介させて頂きましたやきものを使って多くの皆様とお茶を楽しみ、清水比庵の世界を堪能する機会に恵まれますことを夢見ています。

以上

清水比庵周辺の人々と
自用印と(四)

相模女子大学名誉教授

柿木原くみ



⑮木印である。側款は琢。琢のみで詳細は未詳。二五作品への押捺があり、画だけの作品が四点ある。最初は「七十六叟比庵」であり「比庵九十三」までの使用が確認できるが、七十七、八十一、八十三から八十六、八十八の使用例は未確認である。



⑯長方形朱文比庵。この印は、玉堂との合作に押捺している。「虫の声」と「向ひ山畑」と題する二点である。また、第三溪との合作二点にも使用している。玉堂との合作は昭和二〇年代頃、三溪とは兄弟展開催の頃と推定できるから昭和四〇年代制作かと察する。

最初の押捺は「三宝柑」と題する作品で書き添えてある長歌に、六十年と七つのむかし生れ出し、とあるところから、昭和二十四年六七歳と確認できる。「八十一比庵」から「比庵九十一」まで押捺作品は二五点を数える。



⑰この印は所在が不明となつていのであるが、刻は細い線に明るさがあり全体は赤が強いので、作品がひきしまるようであり、よく使われている。最初の押捺作品は「比庵七十八」で、押捺

は「比庵九十二」までの歌書画の小品二五点に及ぶ。



⑱前印とは異なり線の太い白文印である。珍しい画のみの作「ねずみ」と「農閑古酒」に押捺。「七十五叟比庵」から「比庵九十二」まで、二四点に押捺。



⑲朱文五分のこの印は、『比庵百華』の印譜にも掲載されておらず、清水家保管にももれていない。実押は作品以外では『比庵歌・書・画』と随筆集「紅をもて」の、共に求龍堂刊行の書籍の奥付に検印として押捺されている。二冊は比庵八十六・八十七歳の刊行で、小振りの朱文印ということを用いられたのであろう。

作品への押捺は比庵としてのごく早い年代からと推察する。それは年令を加筆していない、比庵のみの落款の作品が一〇点あり、全体の四割を占めることによる。年令の最も若い作品は「七十二叟比庵」で、「比庵七十九」が二点、「比庵八十八・八十二・八十七」が各一点、「比庵八十三」が七点、最後に「比庵八十九」である。作品は一点を除いて、歌書画の小品二四点に用いられている。



⑳刻者琢洞。側款に琢とある木印。一九点に押捺されている。「比庵七十六」が最初で、最終が「比庵八十九」である。三溪の椿の画に比庵が歌を添えた合作が一点ある。故郷高梁の四季を題材とした作品が多いようである。

但し、この印は『比庵歌だより』によれば、昭和五年八月一日付の秋田秋良宛の葉書に押捺しているので、比庵六十八歳の折には

所有していたことがわかる。



㉑朱文印、一六点に押捺。「比庵七十六」が最初。最終は「比庵九十三」の不動明王で「らん／＼と豊盛上る金色にわれはこの日も目覚めたるかも」の歌が添えられた最晩年の作だが、筆勢がある。



㉒朱文印、一六点に押捺されているが、うち一一点が「八十一比庵」。不動さま、富士山、野菜果物など、また短歌のみの作品まで同印である。集中的に制作使用したものか。「八十二比庵」と「比庵九十一」が各一点、「比庵九十二」が二点、落款印のみが一点。印は所在不明。

㉓比庵自用印中、二番目に大きい印である。最初の押捺は「比庵八十九」で、最終は「比庵九十二」である。大作の書作品ばかり一八点に押捺されている。「昭和四十八年試筆」とする作品も含まれている。



㉔竹根印。竹根印はおだやかな雰囲気をもつ。最初の押捺は「八十一比庵」で「比庵九十二」が最終である。「比庵」のみが二点、「八十一」が一点、「八十四」が二点、「九十」が一点、「九十二」が四点、「九十二」が六点の計一六作品に押捺されている。

すべてが詩書画作品で、良寛が四点ある。昭和四年「週刊朝日」に「いま良寛、清水比庵八十六歳の青春」という記事が掲載され「いま良寛」の呼び名が広がった。比庵は「今良寛といはれてわれは汗かきぬ本良寛は居眠りてござらう」と詠んでいる。



㉕刻者は彫無季(本名河野省三、一九〇四—一九九二)。岡山県津山の人。側に無季夫刻と款記がある。記年はないが、昭和四三年六十四歳頃より彫無季と号すと年譜にある。比庵作品への押捺は三点で落款は「比庵八十九、九十三」と「比庵」のみである。比庵のみの作は花の下で三人の語らう画に「さくら花たつねてゆけばゆくところみなおもしろきけしきなるかも」との歌が添えられており、落款の比庵の書き振りからこの作が、彫無季の印の最初と察する。「比庵九十三」の作は紅と緑鮮やかな立雛に、花意竹情と添えた瑞瑞しい作である。

彫無季は津山中学校を中退後、上海で二年余暮らした。商店の軒さきに掛けられた招牌(看板)の文字と、彫りの見事に驚かされ、日多忙の中、書をかき刀を持ってその書を彫り始めた。中国の拓本から線を学び、自分の刀を工夫して彫書(彫無季の造語)するようになった。尾崎一雄、北大路魯山人、伊東深水らとの交友の中で学び、荻原井泉水、熊谷守一、奥村土牛らの雅印も刻した、とあるの

で比庵の印は土牛を通してでもあったかと察する。無季は、荻原井泉水とは二人展を開催し、著書「阿呵呵」（昭和五六）の装画は熊谷守一である。

津山郷土博物館を訪ね津山市へ寄贈された彫無季の作品百点の中から、彫書三点・書軸三点・画軸一点・書額二点・画額一点の計一〇作品と、雅印一〇点を特別閲覧させていただいた。特別閲覧は津山市在住の狩野久先生のご紹介によりかなった。津山市寄贈百点集に無季は私のいう彫書とは自書自刻すること、彫書のボエムは古典に立脚しながらも息吹きは現代でなければならない、と記している。作品を通して語りかけてくる、例えば彫書「察」。視より観。観よりは、察と次第に深く見るといふ、と記す彫書は、文徹明の筆致を思わせるが無季のつかんだ目を感じた。いま一つ「紫陽花」はスケッチに通ううち、いつの間にか季節なく見ていられる花の絵ができた。と記している。それを読んだとき筆者の母校相模女子大学のスローガン「見つめる人になる。見つめる人になる。」を想起した。雅印一〇顆は、自由自在に方寸の世界で躍動していて、比庵の書に通ずる線を見た。



②① 「秀一之印」 白文は、『清水比庵―毎日佳境―』の図版二作目の作品に、「比舟」朱文と共に押捺されている。作品には、「辛未新春試筆七舟」に続けて「秀一之印」と「比舟」が押捺されている。辛未は昭和六年。歌は「元日のあまどをくればいけがきにそそとかくれてさなきのゐる。」半折二行のシンプルな作品で、姓名印と雅号印の二顆を押捺している作品は珍しい。「秀一之印」の側款に「阿呵呵」とあるが、残念ながら記年はない。また「比舟」印は所在不詳だが、阿呵呵作二顆組と考える。

刻者の足立阿呵呵（一八六八―一九四六）は山梨県出身その風土のような日本的で平明・温雅な印風の人である。

比庵は三年刊行の歌集『夕暮』では筆名七舟、八年刊行の『朝明』では筆名比舟、そして大正一〇年の俳画『追い羽根』では、「辛酉試筆七舟」と落款を入れている。この作品には印はないが、この年から比庵に改めた。阿呵呵の印は、比庵の雅号の変遷期にもあたりあまり使用されなかった。



②② 端正、謹直といった印象を持つ朱文印で、一二点の押捺を認める。作品をよく引き締める印である。所在不明で側款を確認できない。作品への最初の押捺は「比庵七十八」、最終は「比庵九十一」。一二点のうち「比庵」のみの落款の作品は四点で、酒井三良と奥村土牛との合作を各一点含む。「比庵七十八」が二点、「七十九」が三点、「八十一」「八十六」「九十一」が各一点である。



②③ 白文のシンプルな印である。この印も所在不明で、清水三溪との合作「朝顔」に押捺の一作がある。落款は比庵のみである。他に比庵のみの作品が二点ある。記年のある作品は「比庵七十九」「八十七」比庵、比庵八十三、八十四」が各一点。そして「比庵九十一」が四点、「比庵九十三」が一点で、計一三点のうち、「比庵七十九」の作品はにじみの強い紙の画面いっぱい、に歌を書いているが、他は歌書画作品である。



②④ 印は所在不明。一〇点に押捺されている。作品はすべて書道研究会刊行の作品集に収録されているので、

制作年は明快で、「比庵八十六」が三点、「八十七」「八十八」「九十」が各二点、「九十一」が一点である。作品は歌書画・歌書が各五点である。晩年の印である。



②⑤ 印文は「清水秀一」姓名印で、比庵自用印としては最も初期の印であるが、側款がなく制作年、刻者不明。作品の落款は「七舟」または「比舟」で最初の使用は昭和七年と確認でき、書を中心とした九作品に押捺されている。



②⑥ 印文は「文墨友」である。所在不明。押捺が確認できる作品は二点あり、歌書画の小品で画は「ほおずき」。歌は「風そよぐ庭木のかげを地におきて夕陽の色はすでに秋なり」比庵九十と落款にある。もう一点は「比庵八十四」の「大平楽」と題する書画作品で二顆押捺、うちの一顆がこの印である。「文墨友」は「比庵百華」の印譜でのみ印影が残っている。



②⑦ 白文「比庵」印。刻線が太いので白文でありながら朱の少ない印である。九作品に押捺を確認しているが、落款に年令が記されているのは四作品で、「比庵七十九」が一点、「比庵八十三」が二点、「比庵八十四」が三点である。また、『清水比庵 収蔵品図録』（平二九・ワコーミュージアム）では、「夕明かり」・「月ありぬ」と題する二作品の制作年を一九五五年頃と推定している。つまり昭和三十年比庵七十三歳頃ということであり、こ

の印は七十代から八十代前半位に使用されたと推察する。



②⑧ 四分角の朱分印で、九作品に押捺。②⑦と同一刻者かと推察するが、側款がないので未詳。②⑧と同様、合作が二点ある。一点は「かははぎ」の魚拓で弟・郁との合作であり、昭和二年七月七日の日付で「比庵六十四歳」である。一点は酒井三良との合作で「すみやき」と題し「比庵八十九」の落款がある。また、前出の『清水比庵 収蔵品図録』掲載の三点は一九五五年頃「枝垂桜」・一九六〇年頃「鳩の聲」と「秋」と題する作に使用されている。合作以外は「八十一比庵」一点と、「比庵」のみの落款が三点、印のみが三点で、比較的長い期間使用された印であるといえよう。



②⑨ 白文印「比庵」。八点の作品に押捺されている。「比庵八十九」が三点、「比庵九十」が二点、「比庵九十一」が三点である。いずれも書道研究会刊行の作品集に収録されており、作品の題「あじさい・松かぶら・葡萄・疎菜・椿・柘榴・柿と栗」の画と共に短歌一首が添えられた作品である。このうち「疎菜」は『清水比庵 収蔵品図録』では「野菜」と題されて掲載されている。歌は「貫ひたる野菜うつくしむらさきの玉葱なども中にあるかも」とあり、キャベツ・ラディッシュ・ピーマン・玉葱などが描かれている。



②⑩ 「比庵」白文の陶印で、側款はなく刻者不明である。比庵自用印中、陶印は三顆を確認。この印は陶印ならではの

の、温かさや柔らかさが感じられる。作品への押捺は八点で、制作年は昭和三七年度の「八十比庵」から、「八十二比庵」二点、「比庵八十七」「比庵九十三」が各一点の他、印のみの作が三点である。「山うど（八十）・苺（八十七）・富士（九十二）」は作品集掲載頻度が高い作品である。



⑳ 白文印「比庵」。㉑の「比庵」印と同系統の印である。八点の作品に押捺されている。「比庵八十七」と「比庵八十八」が各一点で、「比庵八十九」と「比庵九十」が各三点である。うち五点は書道研精会刊行の作品集に収録されている。また、「高梁市名誉市民 清水比庵作品集」に収録されている昭和四七年制作の「老木（比庵賛と舟画）」では画には前号の「老木（清水秀）」を押捺、賛にはこの⑳ 白文印を押捺している。「八十九比庵」（昭和四六・書道研精会）には歌書画での「松」「竹」「梅」三点と、八十七・八十八歳時の「富士」にも押捺している。



㉒ 「比庵」白文印で、側に「吉羊」とあり側款は「琢洞」と判読するが、刻者未詳。八作品への押捺を確認。うち二点は屏風作品で、その一点は「比庵七十五隻」とある。また、「大平楽」と題する書画作品は「比庵八十四」とあり印はこの白文印と、㉓の朱文印「文墨友」と二顆押捺されている。その他「比庵八十五」が一点、「比庵九十一」が二点、「比庵」のみが三点である。この印は時々思い出したように使用している。

㉔ 「比庵」朱文一寸三分の石印である。こ



の印は書作品にのみ押捺され「和敬」の二字作品以外は半切以上の漢字作品で、論語・漢詩・蘭亭序の一部など短歌を書いている。「比庵八十七」が二点。落款に「昭和四十五年試筆比庵」とある「学」は論語と一年明けて八十八歳すこやかに「」の歌を書いた八十八歳の作品、「比庵九十三」と記す四つの計八作品に押捺されているように最晩年に使用された印といえよう。



㉕ 「比庵」白文印。ほのぼののどかな感じの印である。「比庵九十一」の代表作「盆踊り」に押捺されている。「比庵八十五」が二点、「比庵九十二」が三点、「比庵九十二」が一点、「比庵」が二点で八作品に押捺され、すべてが歌書画三体での作品である。



㉖ 朱文姓名印で「秀印」。刻者は側款では琢洞と読めるが、不確定で刻者未詳。比庵の本名「秀」を刻しており、作品への押捺は七点である。うち一点は小倉遊亀との合作で。遊亀の白梅の面に、比庵は「ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけうぐひすの声山より聞こゆ」を添えている。比庵八十歳の昭和三七年一月に、銀座松屋で第一回有山会展を開催するが、小倉遊亀は奥村土牛、酒井三良と共に賛助者であった。この白梅はその時の作品ではなからうか。

次号に続く

清水比庵と秋田秋良の不思議な友情

秋田 展生

比庵と笠岡

比庵先生は大正十二年関東大震災の際、混乱を避けて妹の章子（ゆきこ）さんが暮らす岡山県笠岡市内の呉服店に避難しましたが、これにより笠岡と縁ができました。昭和十七年十一月二三日、比庵先生の妻鶴代さんが亡くなり、日光町長を辞し芸術の道に邁進しようとする時期にあたります。精神的ダメージを負った比庵先生を心配した章子さんが引き取ることを申し出たことで比庵先生は昭和十九年、再びこの地を訪れます。この時、戦禍を避けるため娘の明子（はるこ）さん一家とともに笠岡市北部の吉田村平木の藤井家に疎開します。（比庵先生の御令孫はこれにより笠岡小学校に通うことになりました。）笠岡は父質（ただし）さんが裁判所書記官として赴任した地であり、菩提寺である威徳寺もあり、その後度々訪れ充実した時間を過ごしたことで、「私のふるさと」と呼び、愛したまちとなります。

笠岡周辺の歌友

笠岡周辺の歌友の一人に秋田秋良（あきた しゅうりょう）本名晃・明治三十三年一〇月八日（昭和四六年三月二十二日）がいます。

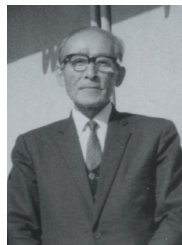


29歳の秋良

秋良は、岡山県浅口郡大島村大字大島中柴木（現在の岡山県浅口市寄島町）に

誕生しました。この時期秋田家は全盛であり、田畑が一町以上、他に寄島の港近くに樽工場をもち、一家は裕福な家庭環境にありました。ところが、放蕩な性格だった父親は工場での仕事が性に合わず、犬養木堂に心酔し政治活動に心血を注いだのです。その結果破産し、田畑、屋敷すべてを失い、残ったのは木堂の書一枚と伝わります。

さて、秋田家の生活は、極貧の中にありましたが、元来勉強好きで成績優秀だった秋良は、家の事情で進学が叶わなかった鬱憤を文芸に向けました。青年期から小説、短歌をこよなく愛し、文芸雑誌への投稿、歌会があると聞けば羽織袴に着替え嬉々として出向いていくなど歌詠みとしての素地が培われていきました。大正十二年、歌友の紹介により鴨方駅前郵便局へ就職、二年後には妻をめぐり、ようやく生活も安定し始めたことから、近郷の歌友と「備南短歌会」を



62歳の秋良

結成し、活発に活動を展開します。一方、昭和初期の比庵先生は、乞われて日光町長に就任し、観光振興に尽力する傍ら雅号を「比庵」と称し、短歌雑誌「二荒」を主宰、発行するなど歌人町長として、行政、文化振興にその才を発揮し始めます。

最初の出会い

昭和五年のある日、笠岡市内で料亭を営む女将が、朝日新聞の懸賞小説に当選します。祝賀会が開かれるのですが、来場者の中に秋良と比庵先生の令妹岡本章子さんがいたので、祝賀の一環として歌会（詠草）が催され、その中で岡本さんの歌が一席に選ばれます。

△ おぼろかに月あるらしも水明り更けてし
めらふ蛙の声かも

△ 水の匂ひにすみつつ行けば屋の風うすら
光りてさざ波に立つ

その歌に未来を感じた秋良はこれをチャ
ンスと捉え、以降岡本さんと短歌を通じた親
交を深めていくことになりました。その過程で
実兄が日光町長であり、以前から短歌を嗜ん
でいることを聞かされ、やがて歌集「朝
明」や短冊が贈られるほどの関係に発展する
のです。

けられるのです。描かれている人物は良寛と
先生は記していたようです。

秋良は、「竹藪の出征記念」として、これは
珍しいうれい銭別である」と日記に記して
います。終戦間際のこの時期、食糧事情が極
端に悪かったはずですが、貴重な食糧である
筍を比庵先生に届け、先生から長歌による礼
状が返って来たあたりに二人の友情が表れて
いると思います。



筍はのびすぎたれど
開墾の 終わりのものと
かきそへて たまひし
たけのこ たけのこよ
その親数は ひらか
れて 芋麦畑と
皇國に つかへま
つらく みいさ
に つかへま
つると
ありがたい
うましたけのこ
世の中の ことにし
あれば たべもの
厨に絶えて すべ
もなく おもひしとき
たまはりし うました
けのこ ありがたいた
けのこ

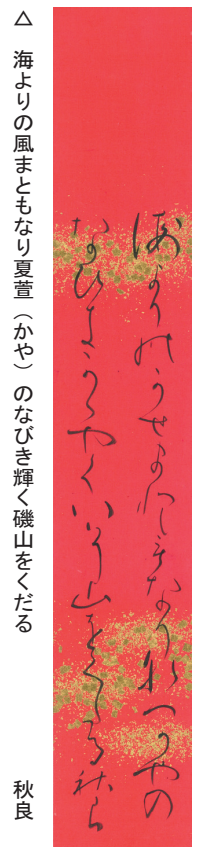
筍の長歌

昭和二〇年五月十二日、秋良は自宅裏庭で
採れた筍を長女に持たせ、笠岡逗留中の比庵
先生に届けます。

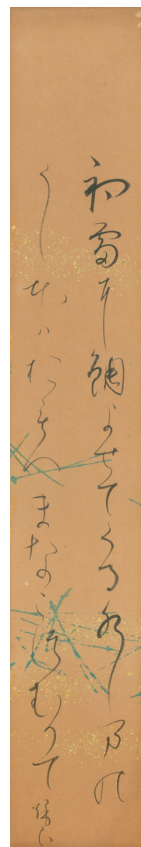
五月十七日、比庵先生からお礼の手紙に
同封された作品が届きます。この時贈られた
作品は右のものではありませんでした。五月
二十三日改めて比庵先生から先の作品は不出
来であるので書き直したとして右の作品が届

信じる道を

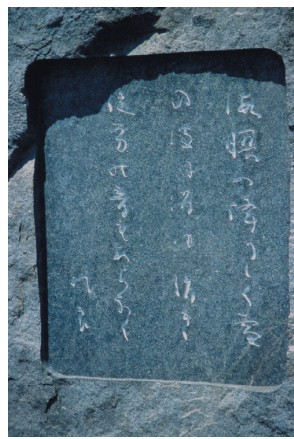
生粋の歌詠みであった秋良の後半生は、
短歌狂であったともいえます。すらすらと歌
が詠めないときは、家族にあたりたり、盥を
蹴つて壊したりと内弁慶のエピソードには事
欠きません。その苦悩の中から次のような歌
が生み出されました。



△ 海よりの風まともなり夏萱（かや）のなびき輝く磯山をくだる 秋良



△ 初雷に鯛よせてくるみずしまの潮はおもえ眼（まなこ）つむりて 秋良



△ 海暎（くら）め降りしく雪の波に消ゆ清き徒労の音もあらんく 秋良

浅口市寄島町に建立された
秋良の歌碑

これらの歌は短歌に命を捧げた男の面目
躍如たる自信作であったのだと思います。

随筆集の中の二人

比庵先生は、短歌雑誌「下野短歌」（現「窓
日」）を主宰していましたが、この中に「駒
込だより」というコラムを設け、毎回執筆し
ていました。そこには、比庵先生の秋良に対
する深い想いを垣間見ることが出来ます。
比庵先生の文章です。

「秋田君の技術はほめ詞が主題になってそ
れにもなう溶けるような笑顔、それはいか
にも善人の容貌で小生はこれに「たてへ主の
みこと」という綽名を呈上しておる。ところが
この秋田君には一つ悪い癖がある。何か事

があつて秋田君の出席を希望していると必ず
何か差支えを言つて断つてくるのである。…
そこで小生は秋田君に「ことはり主のみこと」と
いう敬称をたてまつっている。…それ
からまた、鈴音会の人々と魚釣りに舟を出し、
釣った魚を舟の上で昼飯に食べて残りが相当
あるので、山の中に住む秋田君にそれを持つ
て帰れといつても意固地になつて断る。それ
で小生は腹を立てて海の中へ捨てしまへと
いったようなこともあつた。」

ことはり主のみことぶり全開のこのエピン
ドには続きがあります。鈴音会の会員、石
原昌子さんの寄稿文です。
「…遠慮居士の先生は何事にも遠慮さ
れた。沙魚（はぜ）釣の収穫を分けてもら

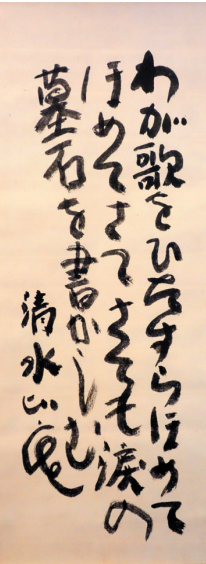
ときも、「私は結構です。」と言われる。固辞されるのでついには比庵先生が怒り出され、「いらぬならみんな捨ててしまへ」と声を荒げられるや「本当は欲しいのです。家でも楽しみに待っておりますので。」とうれしそうに受け取られる。もらうものは必ず「二度辞退された。」

鈴音会

笠岡における比庵先生を語る時「鈴音会(すずのねかい)」は、外すことのできない存在です。会員であった塩飽香代野さんが「鈴音会」と題して投稿した文章を紹介します。

「鈴音会」は終戦当時笠岡に疎開中の清水比庵先生の膝元に集まった同好者たちによって生まれた。秋田秋良先生や浅野清子先生らを主として、先生から歌の話をきく婦人のグループが自然に出来上がった。(作歌は即詠を最も尊しとする)これが先生の歌の信条で、直感の純粋と、把握の正確を第一義として、技巧でひねり廻すことを邪道とされた。歌会の席で先生から題を出され、作歌時間は大体十分程度、時間が来ると先生は何とかいう由緒ある古鈴をチリンチリンと鳴らされる。振鈴を合図に各自苦吟の何首かの披露となる。こうして歌会を「鈴音会」と命名された。

この歴史ある短歌会もどうやら平成二十二年三月にはその役割を終え、今「窓日・笠岡支社」の名前はありませぬ。時の流れを感じずにはいられません。



永久の断り主に

昭和四一年、宮中歌会始の儀に召人として選任されて以降、全国区の人気者となった比庵先生には、各所から歌の指導依頼が急増します。そこで笠岡市周辺の歌会における指導者を秋良に依頼します。比庵先生の文章です。

「・・・岡山、福山で主として書道習っている人々が歌を始めることとなり各々数十人の大所帯となったので、その指導を秋田君に頼んだのだが、例により多少の文句はあったが割合に素直に聴いてくれて、これは秋田君のためにも年七十にしてはじめて生き甲斐のある仕事が出来ると思い、また同時に窓日のためにも、これで喜んでいた矢先に、死んでしまつて永久に断り主のみこととなった。」

昭和四六年三月二十二日、秋良は思いがけない事故に遭遇し、七〇歳の人生を閉じます。突然の死去に動揺した息子は、比庵先生と同じサイズの夫婦墓を建て、それに先生の歌を刻み供養にしたいと強く願い、そして叶えられるのです。

これにより、秋良の墓石には比庵先生の悼歌が刻まれることになりました。

△ わが歌をひたすらほめてほめてきて
さても涙の墓石を書かしむ 清水比庵

その息子も令和三年五月に九十歳で亡くなり、父親のそばへやつと行くことができました。秋良の死去から五〇年が経ちましたが、祖父は息子をどのように迎えたのだろうかと思えば、妄想もまた楽しというところでしょうか。

以上

編集後記

比庵佳境の会

会長 清水 固

令和四年もあつという間に早春になりましたが、コロナ禍の中での関係者の苦心で何とか17号発行出来ました。本号で笠岡市の美術商・豊池勇氏に比庵が絵付けしたやきものに於いて寄稿を依頼しました。そこに記載しておりませんが、高梁市に隣接する真庭市に於いて環境衛生関連事業を営む実業家・牧生夫氏が会社「迎賓館(十字屋迎賓館)」にて今年「清水比庵展」開催を企画されています。本号に掲載したやきものも展示されます。春から夏の時期の開催予定です。詳細が決定しましたら豊池勇氏のFacebook「清水比庵佳境の会」にて発表されます。

本号には前号に引き続き柿木原くみ先生の比庵の自用印についての説明があります。これを見ると比庵の署名、捺印で作品作成時期が明らかになる可能性があります。この記載は次号(18号)まで続きます。

最後はおじい様が比庵と極めて親しい関係であった秋田展生氏に、祖父秋田秋良氏と

清水比庵の友情を「不思議な友情」と題して書いていただきました。二人の出会いのきっかけ、比庵が付けたあだ名、日米戦争中(終戦直前)の食糧危機時の筍の贈答手紙、秋良氏死後の歌碑建立を巡る経緯など色々です。

岡山県笠岡市のワコーミュージアムは、笠岡市ゆかりの芸術家の展示をされており、比庵作品の常設展示コーナーが笠岡グランドホテル一階にあります。

ワコーミュージアムを運営するワコー財団(電話 0854-63570)が所蔵する比庵作品約一〇〇点の内、六十一点が展示されています。

岡山県浅口市金光町金光図書館での比庵展は一〇月に作品を入れ替えて展示中でした。二月で終了いたしました。

お詫びと訂正
毎号末尾に記載の会長の携帯電話番号が誤記されておりました。
謹んでお詫びと訂正をさせていただきます。

× 090-6340-0181
○ 090-6340-9181

比庵佳境の会

会長 清水 固 (清水比庵の孫)
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
携帯 090-6340-9181

URL: <http://www.hat-hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>
メール katashi-shimizu@hat-hi-ho.ne.jp

幹事: 比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488

会費納入のお願い
令和4年度会費を下記に納入されますようお願いいたします。
一口、1,000円(複数口歓迎)
三井住友銀行鶴見支店 普通
7061558
名義 クボタノブユキ
なお現金で会長「清水固」宅(下記)に郵送されても結構です。